

教育時報

2024 No. 132

企画・編集

一般財団法人
総合初等教育研究所

発行

株式会社文溪堂

調査報告 2

「学習指導に対する教員の意識調査」の結果と今後の課題
北 俊 夫

新しい教育の動向 6

今流の算数の指導法
笠 井 健 一

おすすめの1冊 10

「縦と横」で考えるカリキュラム・デザイン
田村 学 著

総教研情報 11



●第39回「道徳と特別活動の教育研究賞」(主催：総合初等教育研究所)中央審査

教育を思う

武蔵野大学副学長
教育学部長
日本特別活動学会理事

上岡 学

特別活動の再評価

特別活動の研究者として、これまで欧米の学校視察を行い、日本の教育と比較してきました。

その中で日本の教育の特徴の一つが特別活動です。学級会や児童会・生徒会での話し合い活動や運動会、学芸会、音楽会、宿泊行事などの学校行事は欧米の学校ではほとんど行われていません。儀式的行事も入学式や卒業式がない国があり、始業式・終業式に関してはほとんど行う国はありません。

日本の学校教育は、教育的であるというものをどんどん取り入れてきました。教科以外のところでは「特別活動」がその役割を担ってきました。特別活動では、生活(話し合い)や文化(学校行事)を通して自主性・民主性・社会性など市民性教育の大切な要素を育成しています。

その結果、自主性・民主性として政治や自治活動へ参加する意識や社会性として多くの人が集まる場所で整然と並ぶことやごみを散らかさないなどの集団社会の規範を身に着けています。

一方、学校でやるのが多くなり、児童・生徒も教師も負担が大きく時間の余裕がなくなりました。学校五日制のときに多くの学校行事が整理されました。

さらに新型コロナウイルスの影響で学校行事は縮小傾向にあります。そのように考えると行事の精選は必要でしょう。しかし、この特別活動の教育の効果は先ほどの例のように非常に重要なことがわかります。

その証として近年東南アジアをはじめ日本の特別活動を取り入れている国が増えていきます。ここで今一度、特別活動の再評価が必要ではないでしょうか。行事の精選は重要ですが、行事の再評価の上で行うべきです。話し合いをあまり経験していない大学生、学芸会を知らない大学生が増えています。運動会も縮小傾向にあります。

何をどこで育てるのか。今一度、働き方改革とバランスよく考えることが必要です。働き方改革の大きな波に大切な教育活動が飲み込まれないよう注意する必要があります。

『学習指導に対する教員の意識調査』の結果と今後の課題

(一財)総合初等教育研究所参与 北 俊 夫



プロフィール

東京都公立小学校教員、東京都教育委員会指導主事、文部省(現文部科学省)教科調査官、岐阜大学教授、国士館大学教授を経て、現職。文溪堂からリーフレット「教育の小径」を毎月発行している。近著に「ものの見方・考え方」とは何か?」「社会科が好きになる授業づくり入門」(いずれも文溪堂)などがある。

1 調査の目的

令和4年度(2022年度)は、GIGAスクール構想が提起され、1人1台の端末のパソコンの整備によるICT教育の充実が求められた。また、学習指導の改善を重点をおいた学習評価が重視され、指導と評価を一体化した授業づくりが課題になっていた。

学習指導要領が示したさまざまな教育課題に
もとづく学習指導が各学校においてどのように

実施されているのか。教員は新しい学習指導の課題に対してどのような意識をもっているのかなど、教育課程の実施及び学習指導上の課題を把握することにより、今後の教育活動に資するための情報を得ることを調査の目的とした。

また、学習評価が課題になっていることを受け、わが国において伝統的な評価教材として使用されてきた「ペーパーテスト」の作成と使用状況を把握し、今後のあり方を検討する資料を得ることを目的とした。

2 調査の内容と方法

調査の実施に当たって、令和2年12月に総合初等教育研究所内に、質問事項の作成と結果分析のための委員会を立ち上げ、調査の内容や実施方法について数回の検討を重ねた。

令和4年6月～9月に、岐阜県内の小学校の協力を得て、予備調査を実施した。その結果を踏まえて、次の3点を主な調査事項とした。

- 学習指導等の課題への対応と課題意識
- 教育のICT化への意識
- ペーパーテストの使用状況

今回の調査は、調査内容を考慮して、日々の学習指導に携わっている学級担任等の教員を対象とした。調査の実施時期は、平成5年2月18日から3月31日まで。インターネット及び郵送

で調査を依頼し、回答を求めた。

有効な回答者数は212人であった。回答者の内訳は、通常学級の担任が162人、特別支援学級の担任が16人、学級担任以外の教員が34人であった。

3 調査結果と今後の課題

ここでは、質問項目ごとに調査結果の概要を示すとともに、見えてきた課題を検討する。

(1) 学習指導等の課題に関すること

① 学習指導要領の課題への取り組み

学習指導要領総則に示されている、各教科等の指導上の課題について重視して実践してきたものを複数回答でたずねた。結果は「主体的・対話的で深い学びを実現する授業」が77%で、他の課題と比べて関心が高かった。次いで、「言語活動を充実させた授業」(49%)、「資質・能力を身に付ける授業」(43%)、「見方・考え方を働かせた授業」(43%)と続いた。

次に、これまでの実践で指導上特に困難を感じている課題を複数回答でたずねた。結果は、「プログラミング学習などICTを活用した授業」が38%で最も多かった。次いで「主体的・対話的で深い学びを実現する授業」(35%)であった。今後、困難を感じた理由や背景を探って必要がある。このあと「指導と評価を一体化」

させた授業」(31%)、「地域の教育資源を活用した授業」(30%)、「見方・考え方を働かせた授業」(28%)、「資質・能力を身に付ける授業」(25%)、「教科横断的な視点で組み立てた授業」(25%)と続いた。43%が重視して実践したと回答した「資質・能力を身に付ける授業」に困難を感じているとする回答は25%でそれほど高くなかった。

結果をみると、多くの教員は指導方法に高い関心をもっている。学習指導要領では各教科の目標や学年目標などに「資質・能力」が示されており、それらを実現させる授業展開が求められている。「資質・能力」の意味と内容を確認し、それらの確実な実現を目指す授業づくりが今後の課題である。また、新たな課題としてプログラミング学習などICTを活用した授業や「指導と評価を一体化」した授業について教員に対する実践的な研修が求められる。

② 学習指導にゆとりをもたせる手だて
日ごろの授業でゆとりある展開をするために有効な手だては何かをたずねた。結果は「授業内容を削減する」との回答が55%で最も多く、このあとの「時間のかかる指導方法は取り入れない」(19%)、「授業時数を増やす」(17%)を大きく引き離している。授業時数を増やすことには否定的な反応が多かった。

次に、「年間の総授業時数(授業コマ数)を増

やすとしたら」と前提をおいて、最もよいと思われる方法をたずねた。結果は、「1単位時間を40分にするが45%で最も多かった。次いで、「長期休業日を短縮」して登校日を増やす(24%)、「1単位時間を45分のまま」で1日の授業コマ数を増やす(10%)と続いた。

年間の総授業時数や現行の45分による1週間のコマ数には限りがある。現在、一部の自治体や学校では40分授業を試行的に実施しているところがある。文部科学省の研究開発学校の指定を受けた東京都目黒区の小学校は、過日「1単位時間40分、午前中5時間授業」の試みを発表した。今後、1単位時間の望ましいあり方が議論されるようになるものと思われる。

③ 英語科及び英語活動の指導体制

5・6年に英語科が創設され、英語活動が3・4年で新たに実施されている。そこで、各学校では現在どのような体制で指導されているかを複数回答でたずねた。結果は、「ALTなどの指導者を配置して、担任とチーム・ティーチングで指導している」学校が64%で、最も多かった。次いで、英語の「専科教員を配置して指導している」が50%であった。半数の学校に英語科の免許状を取得している専任教員が配置され、指導しているものと思われる。「学級担任が指導している」のは34%であった。多くの学校では、英語科や英語活動の指導体制を整える

ために、さまざまな指導体制が取られている。

次に、英語科等の指導体制で最もよいと思われるものを1つ選んでもらった。結果は「外国語の専科教員を配置する」が82%で、際立って多かった。次いで「ALTなどの指導者を配置して、担任とチーム・ティーチングで指導する」が12%。そのあと、校内の「外国語の得意な教員が指導する」(4%)、「学級担任が指導する」(2%)と続いた。教員の負担を軽減し、英語教育の質を向上させるには、英語科を指導できる専科教員等の配置が急務である。

④ 学校の働き方改革の課題

学校の働き方改革が推奨されて数年がたつ。仕事の内容の見直しや勤務時間の正常化など一部に効果が生まれているものの、時間外労働の問題は依然として解決されていない。そこで、現在課題となっている学校の働き方改革について、必要なことを複数回答でたずねた。

上位の結果を順にあげると、「業務の一部を外部に委託」が64%、「業務の協働・分担など校務分掌の見直し」が55%で、いずれも5割を超えた。このあと、「デジタル化による業務の合理化」が43%と続いた。いずれも業務内容の改善を指摘している。次いで、「緊急時等に対応できる人材の配置」が36%、「労働環境の改善」が33%と続いた。

今後、外部に委託する業務にはどのようなも

のがあるのか。それらをどのような外部に委託するのか。委託に当たった際の課題は何かなど、現場教員の声を反映させた検討が必要になる。また、教員の業務内容の削減と教員の増員・配置のほか、学習指導要領に示す教育内容のあり方、教員給与の改善など、多方面からの総合的な改革が求められているといえる。

(2) 教育のICT化への対応

① 教科書のデジタル化

教育のICT化に関連して、デジタル教科書について質問をした。まず、デジタル教科書と紙の教科書の使用についての考えについてたずねた。結果は、「紙の教科書を中心に使い、デジタル教科書を補足として使う」が46%、「紙の教科書とデジタル教科書を同等に使う」が39%で、合わせて85%であった。「デジタル教科書だけを使う」はわずか4%だった。

デジタル教科書の必要性を感じつつも、紙の教科書に思い入れが強いことがわかる。「紙の教科書とデジタル教科書の両者を使う」場合、その使い方はまだ未知数である。紙の教科書だけを使った授業と比べて、デジタル教科書を併用すると、高度な指導方法が求められるのではないか。子どもに過度な負担をもたせることはないかといった指摘もある。

次に、デジタル教科書に適していると思われる教科をたずねた。調査時点において、英語科

はすでに導入が決まっていたが、56%と高かった。英語科を除く教科については、多い順に社会科(75%)、算数科(74%)、理科(69%)で、次いで国語科の(47%)だった。

各教科のデジタル教科書の具体物がないなかで複数回答を求めたため、回答者のイメージや単なる印象による回答だったと思われる。英語科のデジタル教科書の使用後に、改めて適している教科をたずねることも考えられる。

② デジタル化のメリット・デメリット

1人1台パソコン端末が整備されるなど教育のICT化が進行しているなかで、デジタル化のメリットとデメリットについてたずねた。

まず、メリットが「あるかないか」をたずねたところ、「ある」が98%で、ほぼ全員がメリットを認めている。理由を自由記述でたずねたところ、「二人一人に即した指導・学習がしやすくなる」「調べたり意見を交換したりすることが容易にできる」など子どもの「主体的、対話的で深い学び」や学びの向上に関するものが多かった。また、教師の事務処理など業務の効率化や負担の軽減につながるなど、仕事の改善を指摘しているものも多くみられた。

一方、デメリットが「あるかないか」については、「ある」が87%、「ない」が10%、「わからない」が3%であった。「ある」と回答した主な理由には、書く力の低下やタブレット依存、

健康への悪影響など子どもの学習や生活に関わる問題が多く指摘された。また、教員の負担増を危惧するものも多くみられた。このほか、情報モラルの問題や情報環境の遅れを指摘するものもあった。

今後、教育や授業のデジタル化に対して、ICTを活用した授業研究などメリットを生かした取り組みを重視するとともに、引き続きアナログな指導方法を取り入れるなどデメリットを克服する指導の工夫が課題になる。いずれにしても、指導の目標や内容の効果的な実現、業務の効率的な遂行のために、デジタル化のデメリットを克服しつつ、メリットを生かした授業づくりと校務の遂行が望まれる。

(3) ペーパーテストの使用状況

① ペーパーテストの自作状況

わが国において学習評価の有力な手段として使用されてきたペーパーテストについて、自作しているかどうかをたずねた。結果は「いつも自作している」がわずか4%で、「ときどき自作している」の33%を合わせても37%で、「自作していない」が63%で多数を占めた。

次に、ペーパーテストを「いつも」「ときどき」自作している教科をたずねた。国語科(57%)、算数科(53%)、社会科(40%)、体育科(31%)の順で、理科(10%)は家庭科(16%)よりも少なかった。今後、自作されているテストが、単元

末テスト、学期末テスト、単位時間の小テストなどのいづれなのか、自作テストの類型を追跡して調べる必要がある。

② 市販テストの使用状況

市販テストの使用状況をたずねた。結果は、「いつも使用している」が89%で最も多く、「使用していない」が8%、「ときどき使用している」が3%だった。9割を超える教員が市販テストを使用していることがわかった。

次に、「いつも」「ときどき」使用している教科をたずねた。算数科(97%)、国語科(96%)、理科(79%)、社会科(79%)の順で、次いで英語科が25%だった。市販テストを使用している教員に理由を複数回答でたずねた。結果は「自作する時間がない」(67%)が最も多く、次いで、「自作は問題の標準性、客観性に欠ける」(57%)、「市販の方が良い問題が多い」(44%)、「著作権の問題で、写真などが使いつらい」(42%)と、問題の質や作成上の課題を指摘する回答が多かった。

市販テストを購入するとき重視することを複数回答でたずねた。形態面について多かったのは、「問題量やテストの枚数」(68%)と「問題の見やすさ、答えやすさ」(65%)で、このあと「価格の適切さ」(42%)、「写真の大きさや図版の見やすさ」(40%)と続いた。

問題の内容面については、「問題の内容の適

切さ(子どもたちの実態に合っている)(68%)、「教科書の指導事項と合っていること」(66%)、「思考や判断を問う問題」(63%)が上位を占めた。次いで「知識や技能を問う問題」(57%)だった。「記述式の問題」が含まれているかどうかを重視しているのは39%にとどまった。「思考・判断・表現」や「知識・技能」の観点別の問題に関心があり、問題の適切さを重視していることが明らかにになった。

ペーパーテストの結果について、通知表などの評定に生かしている観点をたずねた。結果は「知識・技能」が98%、「思考・判断・表現」が89%で、ほとんどの教員が市販テストの結果を通知表などの「知識・技能」と「思考・判断・表現」の観点を評定する際に有力な資料として生かしていることがわかった。また、「主体的に学習に取り組む態度」の観点到生かしているのは16%だった。授業中の学習態度や行動などの観察で評定されていると思われる。

今後も各観点の趣旨に合った質の高い問題を作成することが求められる。その際、指導に生かす評価の観点から、日常的に実施される小テストなどとの関連を図ることも必要になる。

③ ペーパーテストのデジタル化

これからのペーパーテストのあり方をたずねた。「ペーパーテストとデジタルテストを併用する」は47%で、これからも「ペーパーテストの

みを使用する」が46%で拮抗している。「デジタルテストのみ使用する」はわずか1%にすぎなかった。ペーパーテストはほぼすべてが使用するとの結果になった。「ペーパーテストのみを使用する」と回答した主な理由は、実際に書くことの信頼性や必要性を指摘したものが多かった。デジタルテストの内容がわからない、環境が整っていないなどの理由もみられた。

一方、「ペーパーテストとデジタルテストを併用する」と回答した理由には、両者のメリットを生かす、時代の要請だからといった理由のほか、採点処理等の効率化を指摘するものも多くみられた。小テストやドリル、単元末テストなどテストの形態や教科の特性を踏まえて使い分けるといった意見もあった。社会の変化に積極的に対応していこうとする姿勢がみられた。

今後、デジタルテストとはどのようなものを開発し、学校に提案していく必要がある。

最後に、市販テストに対する要望を自由記述で求めた。「思考・判断・表現」の観点に関する問題の妥当性を求める指摘が多くみられた。問題が「簡単すぎる」「選択する問題が多い」など、問題の難易度に関する指摘もみられた。

社会のデジタル化が進行するなか、新しい時代にふさわしい評価教材が求められる。テスト問題など評価教材を作成・提供する側の力量が問われているといえる。

「今」流の算数の指導法

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

笠井 健一



■プロフィール
東京学芸大学教育学部附属小金井小学校教諭 東京都日野市立日野第七小学校教諭その後主幹、山形大学地域教育文化学部講師 同大学院教育学研究科講師を経て、平成20年10月より現職

より深い理解へ誘う指導とは

かけ算九九を覚えていない子供に対して、個人指導を行っている場面である。

指導の仕方A
T 6×7は C 48?
T 違う。 C 41?
T 違う。 C 42?
T そう。分かっているなら最初から言いなさい。

このとき子供は単に当てずっぽうで次々と答えを言っているに過ぎない。やっと当たって、

ほつとしている。その後、「ロクシチシジュウニ」と何回も繰り返して唱えれば、42と答えを言えるようになるかもしれない。

このような指導は、「6×7の答えが42だと分かる」ことのみを目的とした指導である。けれどもこれでは子供は浅い理解しかしていないと考えられる。ふとしたきっかけで忘れてしまえばそれまでである。つまりこのような教え方をしているのは、なかなか子供は算数ができるようにならないだろう。なぜなら、6×7の答えがなぜ42なのか理由が分からないまま覚えているからである。

そこで指導のねらいを「6×7の答えが42であること、理由も分かる」ことまで高めることが大切である。例えば、次のように指導することが考えられる。

指導の仕方B
T 6×7は C 48?
T 6の段つて、答えが6ずつ増やしていたよね。6×6は36だから、それに6たしたら、答えは幾つ?
C 42?
T そう。36+6を考えればいいのよ。

このように指導すれば、少なくとも6×7の答えが42であること、理由を教師は説明している。答えが分からない児童に対して、理由をしつかり教師が伝えることはとても大切である。子

供が、答えが42であること、理由も理解している、それは深い理解となると考えられる。そのため、子供の理解が深くなるように、教師は指導することが大切である。

けれども、このような指導で実際に子供は、理由まで理解したのだろうか。というのは、ただし、このとき、子供が実際に頭を働かせているのは、36+6のたし算の答えを計算しているにすぎないからである。かけ算の答えが分からないときにどのように考えたらよいのかについて、自分で考えているのではなく、教師の説明を聞いているにすぎないからである。

教師が話したことについて、本当に子供が理解したかどうかを知るには、似た問題を出してみるとよい。そこで、この指導に続いて、次のように教師が問うてみてはどうだろうか。

指導の仕方Bの続き
T 6×7の答えは出せるようになったね。どうすればよかったんだっけ。
C 36+6をすればいい。
T そうそう。6×7の答えが分からなくなったら、そうすればいいよね。
C ところで、もし、6×4の答えが、27だか24だか分からなかったとき、どう考えたらいいと思う?
C
T 6×7の答えが分からなかったら、6×6を基に答えを考えたいでしょ。6×4

の答えが分からなかったら、どんな計算の答えを基に考えればいいと思う？

C . . .

大人だったら、「 6×7 が分からないとき、 $36 + 6$ をすればいい」ことが分ければ、 6×4 が分からないときは、 $18 + 6$ をすればいいということが分かると思うが、算数が苦手な子供はそうではない。数値を変えた場合でも同様に考えることが苦手な子供もいる。そこで、数値を変えた場合でももう一度考えさせ、実際に使えるかどうか確認するとよい。

指導の仕方Bの続きの続き

T 6×4 が分からない場合は、一つ前の 6×3 を考えるといいよね。 6×3 は18だ。このことを使って 6×4 の答えを求められないかな。

C $18 + 6$ ？

T そうだね。なんで6を足そうと思っただの？

C さつきも6足したから。

T 6の段の答えは6ずつ増えているから6を足したんだね。

このように、数値を変えた場合で、実際に試してみることで、子供たちの理解が少しずつ増していくと思われる。

このとき、指導のねらいは「かけ算の答えが

分からないとき、どうしたらよいかを説明することができる」に変わっていることに注意しよう。「 6×7 の答えを出し方が分かる」というレベルより、一段抽象度が高まった、一般的なねらいになったのだ。実際の子供が、かけ算九九で 6×7 だけ間違えるということは、余り考えられることではない。他のかけ算の答えも不安になる子は多いと思う。とすると、このように、数値を変えても実際に同じことができるようになるかどうかまで教師が確認することが大切である。

指導Bでは、教師は「前の答えを使うことを」最初から説明して、そのことを子供に伝えようとした。そうではなく、子供にそのことを考えさせながら、答えを見いださせる指導も可能である。例えば次のようにである。

指導の仕方C

T 6×7 は C 48？

T 6×8 は？ C . . .

T 6の段を 6×1 から順に言ってみようか。

C $6 \times 1 \parallel 6$ 。 $6 \times 2 \parallel 12$ 。 $6 \times 3 \parallel 18$ 。 $6 \times 4 \parallel 24$ 。 $6 \times 5 \parallel 30$ 。 $6 \times 6 \parallel 36$ 。

T すごい。すらすら言えたね。 6×7 の答えって、 6×6 の答えの36よりどれだけ大きいか分かる？

C 6。

T どうしてそう思ったの？

C 6の段の答えは6ずつ増えるって習ったから。

T なるほど。とすると、 6×7 の答えは、幾つになると思う？

C 42。

T その考えを使うと、次の 6×8 はどうなる？

C 48。

T 自分で正しい答えを導くことができたね。

このように指導することで、子供自身が6の段では、6ずつ増えるというきまりがあることを思い出し、そのきまりと、自分が知っている6の段のかけ算の答えを基に考え、答えを導くことができたと考えられる。教師の説明によって $36 + 6$ の計算だけ考えた先ほどの指導Bとは、大きく異なることが分かるだろう。

このように、6の段では答えが6ずつ増えるというきまりを、子供自ら思い出させそれを活用して、答えを導くことができたとしたら、答えが42であることについて、より深く理解していると捉えることができる。

指導の仕方について、Aがよいか、Bがよいか、Cがよいかは、子供の実態によって決まる。子供の様子を見て適切な指導をすることが大切である。

第2学年のかけ算の内容について、小学校学習指導要領には次のように示されている。

(3) 乗法に関わる数学的活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

(ア) 乗法の意味について理解し、それが用いられる場合について知ること。

(イ) 乗法が用いられる場面を式に表したり、式を読み取ったりすること。

(ウ) 乗法に関して成り立つ簡単な性質について理解すること。

(エ) 乗法九九について知り、1位数と1位数との乗法の計算が確実にできること。

(オ) 簡単な場合について、2位数と1位数との乗法の計算の仕方を知ること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(ア) 数量の関係に着目し、計算の意味や計算の仕方を考えたり計算に関して成り立つ性質を見いだしたりするとともに、その性質を活用して、計算を工夫したり計算の確かめをしたりすること。

(イ) 数量の関係に着目し、計算を日常生活に生かすこと。

かけ算については、「乗法九九について知り、1位数と1位数との乗法の計算が確実にできること。」と示されているように、乗法九九がすらすら言えるようになることも、昔から変わらず大切なことではある。

しかし、これだけにとどまるものではない。

「数量の関係に着目し、計算の意味や計算の仕方を考えたり計算に関して成り立つ性質を見いだしたりするとともに、その性質を活用して、計算を工夫したり計算の確かめをしたりすること。」と述べられているように、計算に関して成り立つ性質を活用して、計算の確かめをすることも大切な学習内容なのである。

学級全体でどの考えが正しいのか考える授業

令和三年度の全国学力・学習状況調査の小学校算数の大問4の(2)は次の問題である。

「8人に、4Lのジュースを等しく分けます。

1人分は何Lですか。求める式と答えを書きましよう。」この問題で $4 \div 8$ と正しく式を立てられた児童は56・7%であり、 $8 \div 4$ と式を書いた児童は、38・2%である。

この問題を子供たちに提示したときの指導の仕方について考えよう。

指導の仕方ア

T どんな式になると思えますか。何算か

分かる人？

C わり算だと思えます。

C いいです。同じです。

T じゃあわり算なら、どんな式になると思う。

C $8 \div 4$ です。

C 違います。 $4 \div 8$ です。

T どちらなんだろう。 $8 \div 4$ だと思う人？あれ？いないの？じゃあ $4 \div 8$ だと思う人？全員？みんなそうなの？それなら $4 \div 8$ でいいですね。

子供たちの中には、 $8 \div 4$ だと思っている子供もいた。けれどもこの子は、学級の空気を読んで、 $4 \div 8$ と発言した子供がいつも算数ができる子供で、 $8 \div 4$ と発言した子供がそうではないことに気づき、自分は $4 \div 8$ だと意見をさつと変えてしまったのである。それでクラスの全員が、結果として $4 \div 8$ という正しい式を選んだのである。

$8 \div 4$ と考えた子供は、なぜ $4 \div 8$ が正しいのかは分からないままである。

つまりこの指導では、教師や子供は、結果として正しい式が選ばれたいと思っただけなのである。けれどもこの場面の指導のねらいはそれだけではない。なぜ $4 \div 8$ が正しいのかを説明できることまで子供に求めることが大切である。そうであつて初めて、子供たちは、自信をもつて、

4÷8が正しいことが理解できるからである。

そのためにはまず、教師が分からない子供にも分かるように説明できることが求められる。この問題では、実際に4Lのジュースを8つのコップに分けるなど、具体物を用いたり、その様子を絵や図に描いたりして、場面をイメージさせることが大切である。その上で、さらに上質な指導としては、教師が説明するのではなく子供がそのことを説明することで、分からない子供が分かる指導ができるとよい。

指導の仕方イ

T どんな式になると思いますか。まず自分の考えをノートに書いてみましょう。
(8÷4と書く子。4÷8と書く子。分からないので空白な子。隣の子供の式を見て、自分のノートに写す子。などいろいろな子供がいることを確認する。)

T 先生が見て回ったら、8÷4と書いた人と4÷8と書いた人と分からない人がいました。(8÷4と4÷8の式を板書する)

今日はこの場面は、どういう式になるか、みんなが分かるように説明することができるようになりますか。

それでは、今度は、自分が書いた式の理由を周りの人と話してみよう。

8÷4なのか。4÷8なのか。どちらが正しいのかということを考えるために、そのように考えた理由を探るのである。そして、今までのわり算を基に、どちらにも理由があることを確認していく。

指導の仕方イの続き

T 周りの人といろいろ話して、それぞれに理由があることが分かりましたか。8÷4と考えた人の理由はどういう理由でしたか。

C 今までのわり算は、いつでも大きな数÷小さな数で考えていました。だから8÷4です。

T 今言った○○さんの考えは皆さんに伝わりましたか。どうして8÷4だと考えたのか、隣の人と確認しましょう。

C 大きな数÷小さな数だからだね。

C 今までもそうだったからだよね。

T 今までのわり算の場面を思い出してみよう。例えば「みかん8こを4人で等しく分けたら一人分は何個ですか。」(板書する)という問題の場合、どんな式になりましたか。

C 8÷4です。

C 等しく分けるときはわり算だからです。

C 一人分を求めるときはわり算だったからです。

T 確かに今までは、大きな数÷小さな数で答えを出していましたね。では4÷8と考えた人はどのように考えたのでしょうか。

C この問題は4Lのジュースを8人に等しく分けたと書いてあります。だから4÷8です。

C 8÷4をしたら答えは2になって一人分が2Lとすると変だからです。

T 今言った○○さんの考えは皆さんに伝わりましたか。どうして4÷8だと考えたのか、隣の人と確認しましょう。

C ??

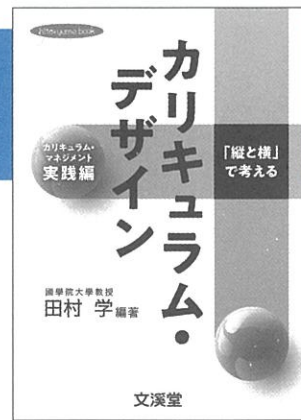
T まだ伝わっていない人が多いようですね。だれか、同じことを図を書きながら説明できないでしょうか。

紙面がつきてしまったが、このように、つまづいている子供たちの考えに寄り添いながら、その考えを全員に共有しつつ、授業を進めることで、分からない子供も自分の誤りに気付き、どのように考えたらよいか分かるようになると考えられる。

おすすめの1冊

「縦と横」で考える カリキュラム・デザイン

國學院大學教授 田村 学 編著 <文溪堂>



カリキュラム・マネジメントは重要なキーワードとして定着したものの、まだまだ具体が見えない状況にあります。カリキュラム・マネジメントという言葉は、多様な内容を含んでいるため、どこから手をつければよいのか分からないという声を聞きます。

具体的な実践例を通してカリキュラム・マネジメントをやさしく解説したのが本書です。

学習指導要領では、「資質・能力」を育成するという考え方が大きな柱になっています。「資質・能力」を育成するためには、「アクティブ・ラーニングの視点による授業改善」とともに「カリキュラム・マネジメントの充実」の両輪が必要です。そして、カリキュラム・マネジメントの中核にあるのが、カリキュラム・デザインです。

カリキュラム・デザインは3つの階層で構成されます。

1つ目は、学校の教育活動を総括したり、俯瞰したりする「グランド・デザイン」すなわち全体計画です。

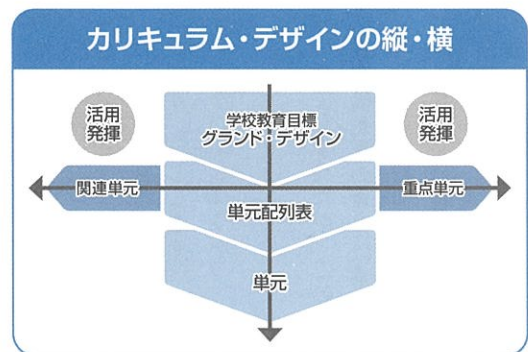
2つ目は、年間指導計画を1枚にまとめた「単元配列表」です。単元配列表を作成することで、年間すべての教科・教育活動が俯瞰できます。

3つ目は「単元」です。単元が、いかにつながりのある連続したプロセスとして具体化されているかが重要になります。

今まで述べた3つの階層がカリキュラム・デザインの縦になります。

知・徳・体で書かれている各学校の教育目標を「資質・能力」の3本柱(「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」)で整理再構成し、目の前の子供に照らし合わせて短期目標を設定する。直近の数年間で育てたい「資質・能力」が明確になれば、授業にも落とし込めることになる。カリキュラム・デザインを縦で考える意義はここにあります。

カリキュラム・デザインの横とは単元配列表で横展開していくことです。各教科や総合的な学習の時間において、「深い学び」の実現に直結する「資質・能力」が「活用・発揮」される「重点単元」を設定します。そして、「重点単元」で育成された「資質・能力」が教科等間で「活用・発揮」される「関連単元」を意図的に設定します。



カリキュラム・マネジメントの基本(理論)については、既刊『「深い学び」を実現するカリキュラム・マネジメント』<田村 学著/文溪堂>を併せて参考にしてください。

総 教 研 情 報

一般財団法人総合初等教育研究所主催事業のご案内

<http://www.sokyoken.or.jp>

募集 第41回道徳と特別活動の教育研究賞

児童の道徳性や道徳的実践の指導、道徳的実践力を育てる研究、または望ましい集団活動を通して自主的、実践的な態度を育てる研究等、優れた道徳科や特別活動の実践的研究論文を募ります。

◎**対象部門** 全国の小学校の学校(団体)、または教師(個人)を対象とし、次の部門を設定します。
Ⅰ「道徳」の部 Ⅱ「特別活動」の部

◎表彰

■文部科学大臣賞 両部門各1編(「道徳」の部、「特別活動」の部最優秀賞受賞者または団体)

■「道徳」の部

最優秀賞(賞状・奨学金15万円) … 1編
優秀賞(賞状・奨学金7万円) … 1～2編
奨励賞(賞状・奨学金3万円) … 数編
敢闘賞(賞状・図書カード) … 応募者

■「特別活動」の部

最優秀賞(賞状・奨学金15万円) … 1編
優秀賞(賞状・奨学金7万円) … 1～2編
奨励賞(賞状・奨学金3万円) … 数編
敢闘賞(賞状・図書カード) … 応募者

◎締切・発表

■応募申請締切日 令和6年10月31日

■応募原稿締切日 令和6年12月2日

■入賞発表 令和7年2月中旬

*詳しくは右記までお尋ねください。

〒501-6238 岐阜県羽島市江吉良町江中7-1
一般財団法人総合初等教育研究所
「道徳と特別活動の教育研究賞」係
Tel.058-398-6633

募集 第48回「てのひら文庫賞」読書感想文全国コンクール

読書力の育成と子供の書く力をも併せて高揚されることを念願し、この読書感想文コンクールを実施いたします。

◎**応募資格** 小学校児童 *在籍校を通じての応募に限る

◎**応募部門** Ⅰてのひら文庫部門 「てのひら文庫」(文溪堂発行)の学年配当指定図書
Ⅱ自由図書部門 「てのひら文庫部門」以外の児童向図書の感想文

◎用紙・字数

●400字詰め原稿用紙を使用 ●1年:400字～1,200字 ●2年:800字～1,200字
●3・4年:1,200字～1,600字 ●5・6年:1,600字～2,000字

◎表彰

■個人賞

文部科学大臣賞 … 3名 優良賞 … 36名
石森延男賞 … 1名 佳作賞 … 120名
最優秀賞 … 12名 奨励賞 … 240名

■学校賞

最優秀校 … 1校 奨励校
優秀校 … 3校 *校数は審査基準に照らし合わせて決定
優良校 … 5校

◎締切

2024年令和6年9月20日(金)

*詳しくは下記までお尋ねください。

〒501-6238
岐阜県羽島市江吉良町江中7-1
一般財団法人総合初等教育研究所
「てのひら文庫賞読書感想文全国
コンクール」係 Tel.058-398-6633

「考えている」とは ～授業参観より～

子供がじっと見つめている。その先には学習問題が提示されている。掲示板には、学習問題に関連する既習内容が映し出されている。子供が少しずつ動き始める。自分のノートをめくり返している子供がいる。掲示物の前に行き、友達と話している姿が見られる。今日の学習問題と既習内容の何かをつなごうとしているのかな。「あれ。」とつぶやいた子供の表情が険しくなった。一歩進んでは半歩後戻りしているのかな。そこからまた友達と語り合っ、「でも」「そうか」などの声にしている。座席

では、頭を突き合わせるように前のめりになって話し合っている。一人一人が自分のペースで「考えている」ことがひしひしと伝わってくる。

ある授業を参観した子供の姿から「考えているとは」を学んだことを思い起こした。子供に考えさせようではなく、子供が考えているこの授業には、「もう終わりなの」の子供のつぶやきがあった。

一般財団法人総合初等教育研究所
室長 福田 俊彦

隔月誌

道徳と特別活動

B5判・96頁
奇数月15日発売

各号定価

1,090円(税込)

発行/株式会社文溪堂

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店

※「道徳と特別活動」は富士山マガジンサービスで販売しています。

お問い合わせ

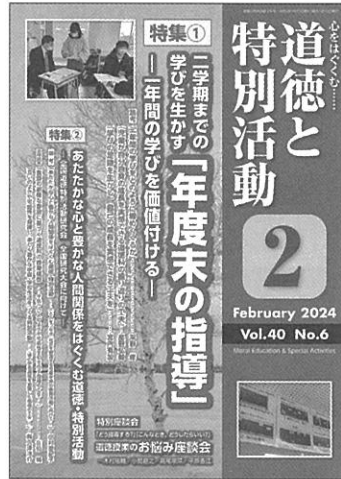
株式会社 文溪堂 ぶんけい教育研究所

TEL : 03-5976-1512 E-mail : d-magazine@bunkei.co.jp

富士山マガジンサービス カスタマーサポート

E-mail : cs@fujisan.co.jp

お問い合わせフォーム <http://www.fujisan.co.jp/faq/>



教育時報 No.132

企画・編集 一般財団法人 総合初等教育研究所

〒501-6297 岐阜県羽島市江吉良町江中7-1 ☎058-398-6633

〒112-8635 東京都文京区大塚3-16-12 ☎03-5976-1309

〒578-0903 大阪府東大阪市今米2-7-24 ☎072-966-2111(代)

発行所 株式会社文溪堂

〒501-6297 岐阜県羽島市江吉良町江中7-1 ☎058-398-1111(代)

〒112-8635 東京都文京区大塚3-16-12 ☎03-5976-1311(代)

〒578-0903 大阪府東大阪市今米2-7-24 ☎072-966-2111(代)